

千葉市築地貝塚

一戸建住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2021

大木ツ子
千葉市教育委員会
株式会社 ノガミ

ち　　ば　　し　　き　　じ　　かい　　づか

千葉市築地貝塚

—戸建住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2021

大木ツ子
千葉市教育委員会
株式会社ノガミ

例 言

1. 本書は千葉県千葉市花見川区長作町築地に所在する築地貝塚の発掘調査報告書である。
2. 調査は千葉市教育委員会が主体となって行い、大木ツ子の委託を受けた株式会社ノガミがこれを支援した。
3. 出土資料・調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで管理・保管している。
4. 発掘調査の期間は2021（令和3）年4月5日～4月15日（本調査）で、調査面積は63m²である。
5. 調査担当者は松田光太郎（千葉市埋蔵文化財調査センター）、調査員は山中悟朗（株式会社ノガミ）である。測量員は儘田聰（株式会社ノガミ）である。
6. 整理期間は2021（令和3）年4月16日～5月31日である。
7. 本書の執筆は第1章調査に至る経緯を松田光太郎（千葉市埋蔵文化財調査センター）が、第1章のその他、第2章遺構を山中悟朗、第2章遺物を齊藤泰洋（株式会社ノガミ）、第2章動物遺存体は西野雅人（千葉市埋蔵文化財調査センター）が行った。
8. 遺物の接合・実測は、長谷川秀久、長谷川則子が行った。
9. 発掘参加者 飯島幸子 齊藤恵子 前田美知 山崎典子
10. 発掘調査から報告書刊行まで、次の方々や諸機関のご指導・ご協力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表します。
折原繁 長谷川秀久 長谷川則子 有限会社 新成田総合社 株式会社 都重機

凡 例

1. 本書に掲載した遺構図等の方位は、公共座標の北を基準としている。
2. 土層及び遺物の色調は、農林水産省監修「新版標準土色帖」による。
3. 本文中の挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構実測図：1/60・1/30 遺物実測図：土器 1/4・1/3・1/2、石器 1/2
4. 遺構・遺物の図面はAdobe Systems社製Adobe Illustratorで編集作業を行った。
5. 遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影し、Adobe Systems社製Adobe Photoshopで加工・編集作業を行った。
6. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行2万5千分の1電子地図を使用した。
7. 挿図等に用いた遺構の略記号は次のとおりである。土坑：SK、ピット：P
8. 遺構図面、土層説明中の略称は次のとおりである。カクラン：K

目 次

例言・凡例

目次

第1章 序論	1
第2章 遺構・遺物	6
第3章 まとめ	13

挿図目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 周辺遺跡位置図	2
第3図 基本土層	4
第4図 遺構全体図	5
第5図 遺構実測図	7
第6図 SK5出土遺物	8
第7図 SK2・4・5出土遺物	9
第8図 SK5・遺構外出土遺物	10

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	2
第2表 出土遺物観察表	11
第3表 貝種組成	12
第4表 オキアサリ殻分布	12

写真目次

図版1 調査地遠景	調査前状況	表土掘削	掘削状況	P1完掘	P3完掘	SK2完掘	SK4完掘
図版2 SK5遺物出土状況	SK5完掘	北側完掘全景	南側完掘全景	テストピット			
図版3 SK2・4・5出土遺物							
図版4 SK5・遺構外出土遺物							

第1章 序論

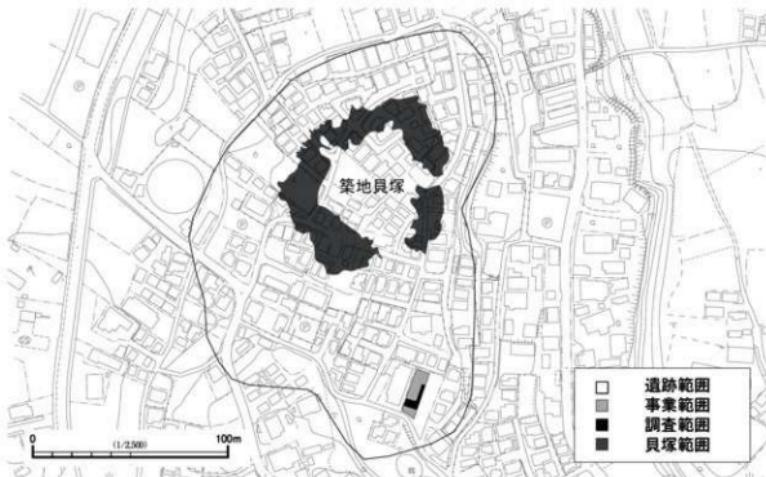
1 調査に至る経緯

令和2年12月7日付けでタクトホーム株式会社（以下「事業者」という。）から、戸建分譲住宅建設を計画している千葉市花見川区長作町296番（面積294.83m²）について、「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出され、令和3年1月21日に千葉市埋蔵文化財調査センターが試掘を実施した結果、縄文時代の土坑が検出された。

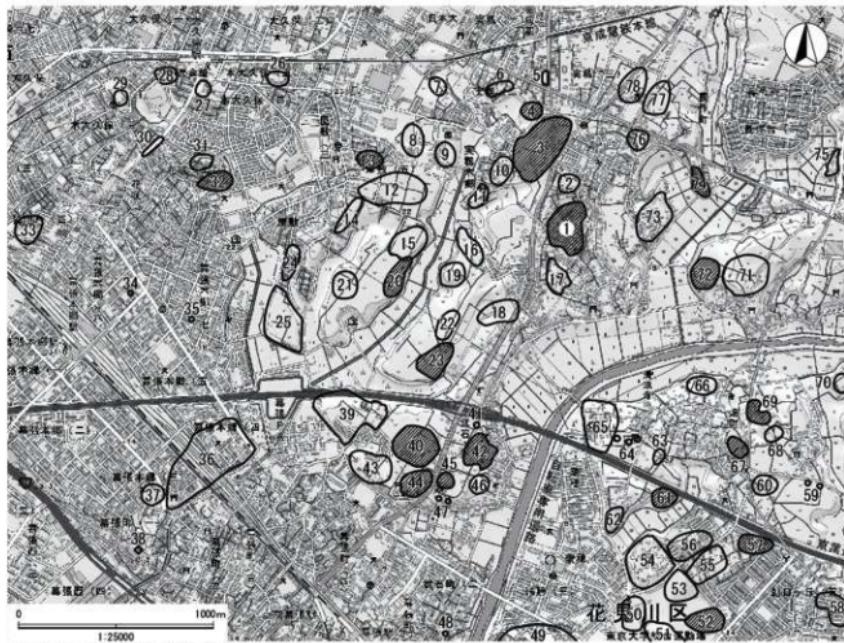
試掘結果を事業者に伝え、協議した結果、発掘調査が避けられないことが判明したため、1月26日、2千教埋セ第386号にて、発掘調査を実施するよう通知した。その後、2月3日、事業者より発掘調査（確認調査）の依頼文が提出され、2月5日付け2千教埋セ第461号にて千葉県教育委員会教育長宛て報告し、2月8日～10日の日程で千葉市埋蔵文化財調査センターが確認調査を実施した。

確認調査では縄文時代の土坑3基等が検出され、2月19日付け2千教埋セ第484号にて、総面積294.83m²のうち144m²が本調査対象範囲として継続協議が必要な旨を事業者宛てに通知した。再度協議の結果、住宅建設部分は保護層が確保できるが、通路部分や駐車場建設部分等は十分な保護層が確保できないことが判明したため、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ63m²について記録保存のための本調査を実施することになった。

令和3年4月2日付け3千教埋セ第1号により千葉県教育委員会教育長職務代理者宛て埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、事業者の委託を受けた株式会社ノガミの支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、4月5日～4月15日まで発掘調査を実施した。



第1図 調査区位置図（千葉市道路地図に千葉市史原始古代中世編の貝塚範囲を合成）



国土地籍院行葉地図(1/25,000)に、千葉市遺跡地図(2000)、習志野市埋蔵文化財分布地図(1998)。
ふさの古ヒビゲーション(千葉市以外)の遺跡範囲を加筆

第2図 周辺遺跡位置図(1/25,000)

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	基良貝塚	21	清水作台遺跡	41	武石古墳	61	緑野遺跡
2	瓦絆遺跡	22	習志野遺跡	42	桜塚遺跡跡	62	雷門台遺跡
3	実鷹1丁目遺跡	23	習志野熊野遺跡	43	稚柳遺跡	63	宮駒遺跡
4	実鷹2丁目東遺跡	24	照敷1丁目遺跡	44	武石遺跡	64	子安古墳群
5	実鷹2丁目駒越遺跡	25	ムクナ山遺跡	45	三代内貝塚	65	宮駒遺跡
6	浜田台遺跡	26	木下久保4丁目遺跡	46	寺台遺跡	66	無・花輪遺跡
7	実鷹2丁酉西遺跡	27	木下久保4丁目遺跡	47	大久保古墳群	67	原照遺跡
8	原照遺跡	28	大久保船出遺跡	48	愛宕山古墳	68	拂星遺跡
9	実鷹本郷遺跡	29	木下久保4丁目遺跡	49	南高台遺跡	69	神浦遺跡
10	実鷹室宿遺跡	30	花咲新田台遺跡	50	寺合遺跡	70	武山遺跡
11	実鷹城跡	31	花咲台遺跡	51	中谷遺跡	71	坊沢田遺跡
12	原照南遺跡	32	花咲貝塚	52	鶴牧遺跡	72	坊沢貝塚
13	所敷貝塚	33	實治台4丁目遺跡	53	中鶴牧遺跡	73	上ノ山遺跡
14	小谷津遺跡	34	東葛羅深古墳群	54	殿山遺跡	74	長作加山遺跡
15	清水作台遺跡	35	鉄砲塚古墳	55	上鶴牧遺跡	75	天門公園遺跡
16	習志野外野遺跡	36	上ノ台遺跡	56	御林遺跡	76	御藏舟遺跡
17	長嶺寺跡	37	宮ノ台遺跡	57	福村遺跡	77	南門原遺跡
18	東谷津遺跡	38	大果製山屋	58	美輪遺跡	78	西門原遺跡
19	石丘熊北遺跡	39	豊加跡	59	拂星古墳群		
20	清水作台遺跡	40	貝殻堆遺跡	60	福込遺跡		

田: 砂石器 潟: 漢文 鋼: 弥生 古: 古墳 幕: 幕府 平: 平安 古代 (奈良・平安) : 古代 中: 中世
近: 中世近 (早: 早期 後: 晩期 中: 中期 後: 後期 次: 次期)

2 遺跡の位置

千葉市は房総半島西部に位置し、西は東京湾に面する沖積低地であり、東は比較的平坦な下総台地に占められている。

本遺跡は、千葉市北方の習志野市境に近い千葉市花見川区長作町築地地籍に所在する。

この地は、北西に京成実初駅や御成（東金）街道、南東には京葉道路の武石インター・チェンジがおよそ直線距離1km圏内にあり、交通の利便性が良いことから宅地化が著しい場所である。さらに南に2.6km向かうと台地の辺部には、かつての旧国道14号線（房総往還）が通り、それ以南は東京湾に到り砂浜が連なる遠浅の海であった。1960年代から始まった埋め立て事業により現在の海岸線は2.5kmほど沖合となり、旧海浜には団地・住宅の造成がなされ、幕張新都心と言われる幕張メッセ一帯は大型の商業施設や高層ビルが林立している。

築地貝塚は、東京湾に注ぐ浜田川と花見川に開析された南西を向く半島状の舌状台地のほぼ中央東側あたりから、花見川に向かって開析される小支谷の右岸に位置している。

この場所は、北と南からも弧状に谷が入り西側だけが台地に接しており、いわば台地から東に向かって谷に張り出す出丸のようになっている。その規模は、南北約290m、東西約160m、標高は約22mを測る。

本遺跡は貝塚として認知されていたが、1960（昭和35）年の「印旛・手賀両沼周辺地域の埋蔵文化財調査（早稲田大学考古研究室）」や1971（昭和46）年の千葉市立高等学校社会研究クラブの測量により、台地を南北二分した北側は南北約140m、東西約110mの南側に開口部を持つ馬蹄形貝塚が所在し、遺物から縄文時代後期に属すると確認されている。今回の調査地は、この貝塚を外れた南側にあたる台地縁辺である。

3 歴史的環境

花見川流域の縄文時代の遺跡は早期茅山の東谷津（18）、地蔵作（76）から始まり、前期は関山の実初3丁目（3）のほか実初本郷（9）、実初靈園（10）がある。西側台地には早期の野島、鶴ヶ島台、茅山の清水作（20）があり、その支谷の付け根には夏島、茅山の宮ノ台（37）、茅山の上ノ台（36）、東側には鶴牧（52）、植野（61）、原屋敷（67）などいずれも茅山や前期栗島台の坊辺田（71）があり早・前期の縄文遺跡は充実している。同様に中期も活発で屋敷貝塚（13）、屋敷東（8）、実初2丁目西（7）のほか、花咲貝塚（32）のように前期浮島～中期加曾利Eの複合遺跡が非常に多い。本遺跡と同時期である後期は堀之内の辰巳台（6）、貝塚を伴うものは加曾利E、堀之内、加曾利Bの奈良熊南（23）や堀之内の実初2丁目東（4）、貝塚の形成時期は不明ながら堀之内、加曾利B、安行と晚期に統く武石（44）がある。

弥生時代は中期宮ノ台の馬加城跡（39）、後期久ヶ原の武石（44）と遺跡数は減少する。

古墳時代では、武石（44）、椎崎（43）、権現越（42）や後期の馬加城跡（39）、寺台（46）、三代内（45）や前方後円墳と円墳を持つ東鉄砲塚古墳群（34）や武石古墳（41）、大小塚古墳（47）などの円墳がある。

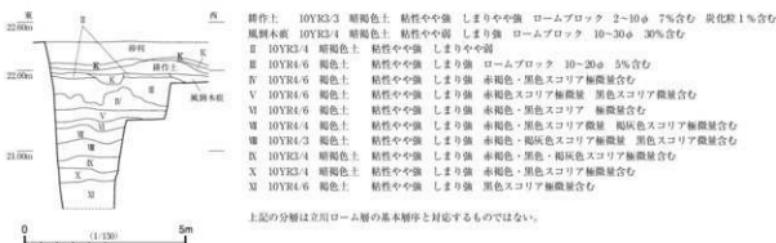
古代になると遺跡数がさらに増加し、武石（44）、貝殻畑（40）、東谷津（18）、奈良熊（22）、奈良

熊南（23）、奈良熊北（19）、奈良熊外野（16）、椎現越（42）、荒耕（2）がある。

中世になると、馬加城跡（39）、実利城跡（11）、長胤寺館跡（17）などの千葉氏の各支城が築かれ、調査地の台地最南端には、千葉氏が信仰した妙見神社（現、天津神社・大正時代に改名）がある。

4 基本土層

調査地東南隅にテストピットを設定し、基本土層（第3図）の観察を行った。遺構確認面はⅢ層上面である。



第3図 基本土層

5 調査の方法

表土除去作業は重機により行い、その後に人力により遺構確認作業、遺構調査を行った。

測量は機械により測量基準点を設定し平面・断面図とも手実測にて行い、遺物出土状況図はオルソ写真を元に作図した。

遺構実測は1/20を基本とし、状況に応じて1/10を併用した。記録写真是デジタル一眼レフカメラと35mmカメラ カラーリバーサルフィルムを用いた。

6 調査の経過

4月5日 発掘機材搬入および仮設トイレの搬入。表土除去。

6日 表土除去作業を継続し、遺構確認作業を開始する。遺構調査、写真撮影を行う。

7日 基準杭打設。遺構調査、写真撮影・実測を行う。

8日 遺構調査、写真撮影・実測を行う。

9日 遺構調査、写真撮影・実測を行う。テストピットの設置・掘削を行う。

12日 テストピットの掘削を継続し、遺構調査、写真撮影・実測を終了し調査を終了する。

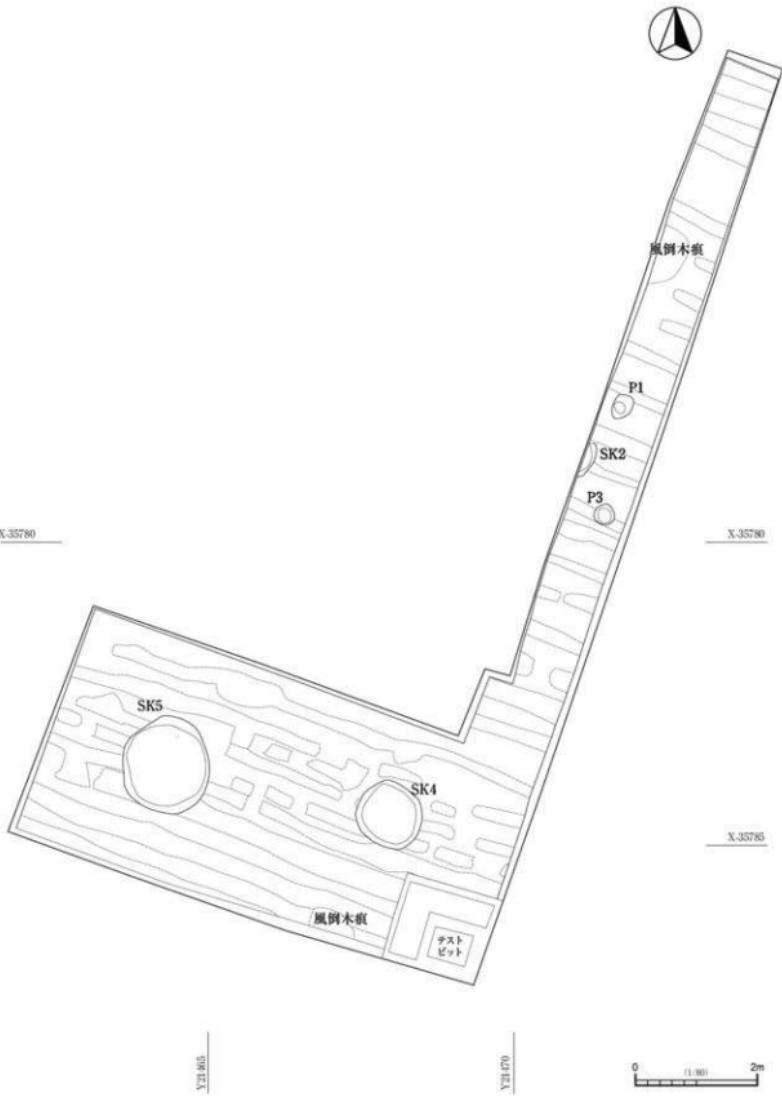
13日 埋め戻し、整地作業。発掘機材搬出。

15日 発掘機材搬出および仮設トイレの搬出。現地全業務を終了。

X-35770

02112A

X-35770



第4図 遺構全体図 (1/80)

第2章 遺構・遺物

1 遺構

検出された遺構は、縄文時代の土坑3基、ピット2基である。

耕作地であったことからいずれの遺構も影響を受けており、SK2においてはトレンチャーによる破壊が大きかった。

(1) 土坑

SK2

調査区の中央北側に位置する。試掘によって確認された土坑の一部と思われる。北側の上端は耕作による搅乱で一部が破壊されている。規模・形状は調査区外のため不明だが、平面形状は南北長0.64m以上×東西長0.18m以上となる。断面は、皿状で掘り込み面からの深さは0.26m以上となる。縄文土器片2点が覆土から出土している。覆土は2層からなっており、人為的な埋め戻しが施されている。

SK4

調査区の南側に位置する。平面形状は長軸長1.10m×短軸長1.03mの不整円形を呈している。深さが0.65m、壁は急傾斜な立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦である。縄文土器片24点が覆土から出土しており、この他小石が数点混入する。覆土は3層からなり、自然堆積後に北側から人為的な埋め戻しを行ったと思われる。

SK5

調査区の南側に位置する。平面形状は長軸長1.57m×短軸長1.48mの不整円形を呈している。深さが0.92m、壁は急傾斜な立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦である。縄文土器・磨製石斧、貝が出土しており、ほぼ一體が復元できた深鉢形土器は、覆土の凹面上に片断が敷き並べられた状態で出土している。土器片の中央上部に混貝土があり、サンプルを取り、分析を行った。貝種はオキアサリがほとんどで、わずかにイボキサゴとアサリが混入する。獸骨・魚骨は検出されなかった。覆土は6層からなり、第4層、第1層が人為的な埋め戻しであり、2回の使用時期が想定され、その後自然埋没したと思われる。

(2) ピット

P1

調査区の中央北側に位置する。平面形状は、長軸長0.43m×短軸長0.31mのほぼ楕円形を呈している。断面は深さ0.20mの「U」字状となる。覆土は2層からなっており、柱の抜き取り後に自然埋没し、その後小粒ロームブロックが入る。

P3

調査区の中央に位置する。平面形状は長軸長0.35m×短軸長0.34mのほぼ円形を呈している。断面は深さ0.38mの「U」字状となる。底面はほぼ平坦である。覆土は3層からなっており、柱の抜き取り後に小粒ロームブロックが入る。自然埋没と思われる。

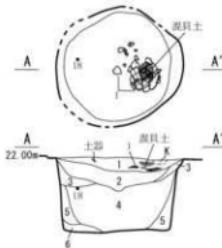


SK2



- 1 10WK2/3 黒褐色土 粘性やや強 しまりやや弱
10WK3/4 塗褐色ロームブロック φ10~20 5%含
2 10WK3/3 塗褐色土 粘性やや強 しまりや強
10WK3/4 塗褐色ロームブロック φ30~40 30%含

SK5



- 1 10WK2/3 黒褐色土 粘性やや弱 しまりやや強
2 黑褐色土 粘性やや弱 しまりやや強
10TR4/6 漆白ロームブロック φ2~4 15%含
3 10WK3/3 塗褐色土 粘性やや強 しまりや強
10WK3/4 塗褐色土 粘性やや強 しまりや強
4 10TR1/2 黑褐色土 粘性やや弱 しまりやや強
10TR4/6 漆白ロームブロック φ4~6 30%含
5 10TR3/3 塗褐色土 粘性やや弱 しまりやや強
10TR4/6 漆白ロームブロック φ10~20 2%含
6 10TR3/3 塗褐色土 粘性やや強 しまりやや強
10TR4/6 漆白ロームブロック 1%含



SK4



- 1 10WK3/3 塗褐色土 粘性やや弱 しまりや強
10TR4/4 漆色ロームブロック φ4~8 5%含
2 10WK3/4 塗褐色土 粘性やや弱 しまりや強
10TR4/4 漆色ロームブロック φ30~50 7%含
3 10WK3/4 塗褐色土 粘性やや強 しまりや強
10TR4/4 漆色ロームブロック φ50~70 3%含

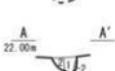


SK5 遺物出土状況

0 (1/20) 0.5m



P1



- 1 7.TRK3/4 塗褐色土 粘性やや強 しまりやや強
10TR3/4 塗褐色ロームブロック φ5 5%含
2 7.TRK4/6 漆色土 粘性やや強 しまりや強



P3



- 1 7.TRK3/3 塗褐色土 粘性やや強 しまりや強
7.TRK4/3 塗褐色土 粘性やや強 しまりや強
2 7.TRK3/3 塗褐色土 粘性やや強 しまりや強
7.TRK4/6 塗褐色ロームブロック φ20 15%含
3 7.TRK3/3 塗褐色土 粘性やや強 しまりや強

0 (1/60) 2m

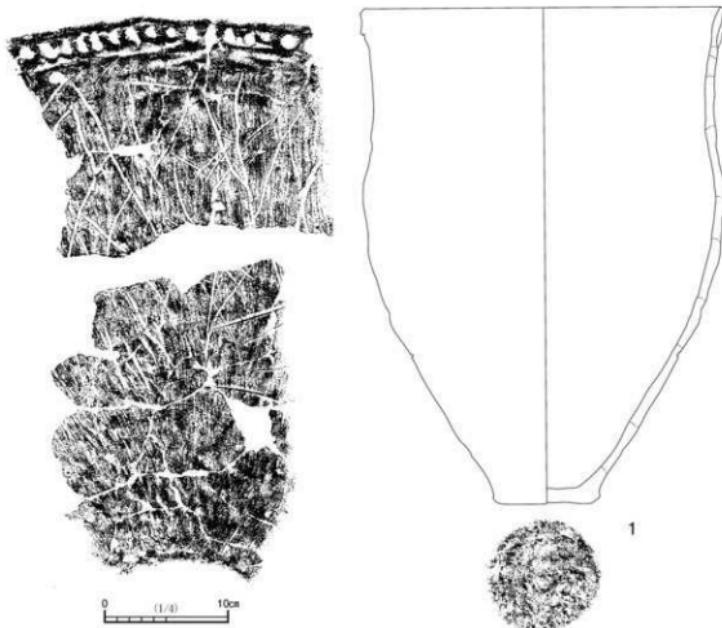
第5図 遺構実測図

2 遺物

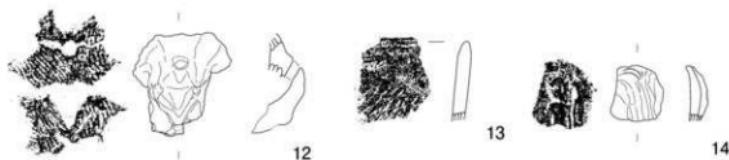
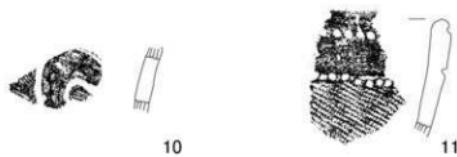
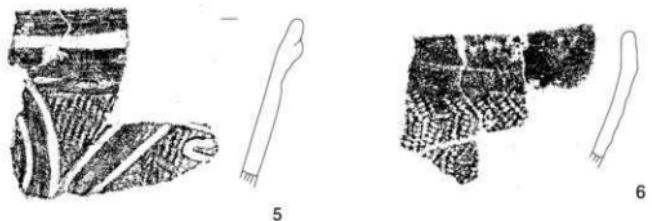
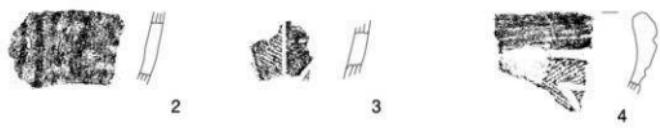
今回の調査により出土した遺物は縄文土器と石斧、近世陶磁器類、近現代の磁器硝子類、金属片であった。そのうち多くを占めるのは縄文土器で、中期末から後期の時期のものである。中でも堀之内1式土器の出土が多く、これに加曾利EⅢ・Ⅳ式、称名寺式が少量加わっている。

第6図はSK5土坑から出土した唯一の完形復元土器である。高さ41.8cm、口径30cm、底径9cmの深鉢形の粗製土器で、底部から胴部にかけて直線状に立ち上がり、頸部でやや径を減じたあと一気に開口する形をとる。器面外面は、全体をへら状の工具でタテナデして平滑化し、その上から断面円形の棒状工具を用いて格子状に斜線を引き下ろしている。斜線には規則性がなく、ランダムに引き下ろした状態である。口縁部には指頭状の円文が一列巡っている。粗製土器のためか口唇部は緩やかに波うち、口縁内部には横ナデが認められ、頸部以下胴部はざらついた粗面のままである。底面外部の周囲はやや盛り上がりぎみで、バリ状の粘土が認められる。これは製作時に土器本体が前後左右に揺されたことが原因と見られる。時期は堀之内1式に該当する。

第8図18は同じくSK5土坑から出土した磨製石斧である。刃部を欠損するが、側面の棱が明瞭に研磨されたいわゆる定角式石斧である。土坑の埋没状況からみて、土器と同じく堀之内式期に属するものと思われる。

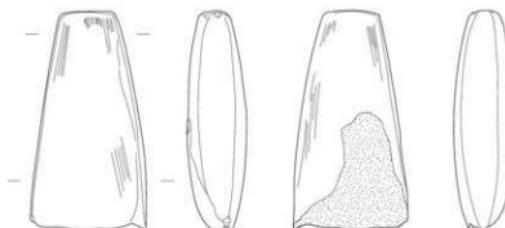
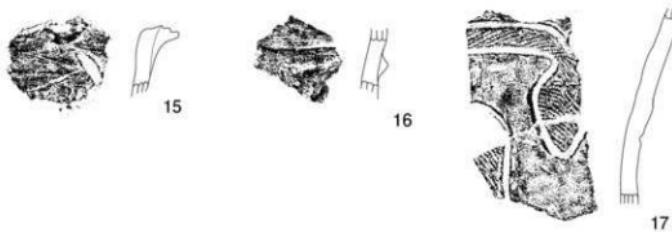


第6図 SK5出土遺物

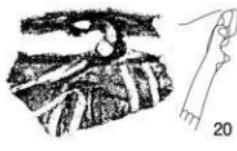


第7図 SK2・4・5出土遺物





0 18 (1/2) 5cm



第8図 SK5・遺構外出土遺物

0 (1/3) 10cm

第2表 出土遺物観察表

遺物番号	遺構番号	部位	装飾施文・調整等	色調	胎土	型式	備考
1	SK5	完形品	ヘラナデ・斜行沈線	茶褐色・煤付着・底部赤色	白色粒・赤色粒・砂粒・透明粒・骨針	瓶之内I式	
2	SK2	胴部	全面タテナデ	茶褐色	白色粒・透明粒・黑色粒・黄褐色粒	加曾利EⅢ式	
3	SK4	胴部	沈線・繩文LR・内部ヨコナデ・下部ミガキ	赤褐色	白色粒・角閃石・透明粒・骨針	加曾利EⅢ式	
4	SK4	口縁部	沈線・磨消繩文LR	外面黑色・煤付着	白色粒・砂粒・透明粒・骨針・赤色粒	称名寺式	
5	SK5	口縁部	沈線・磨消繩文LR・蛇行文・内部ヨコミガキ	外面全体煤付着	白色粒・赤色粒・砂粒・角閃石・透明粒・骨針	瓶之内I式	
6	SK5	口縁部	繩文RL・内部ヨコミガキ	外面全体煤付着	白色粒・透明粒・砂粒・黑色粒	加曾利EⅣ式	
7	SK5	胴部	懸垂文LR・内部ミガキ	赤褐色	白色粒・透明粒・砂粒・骨針・黄褐色土粒	加曾利EⅣ式	
8	SK5	胴部	懸垂文RL・内部ミガキ	外面一部煤付着	白色粒・透明粒・砂粒・骨針・角閃石	加曾利EⅣ式	
9	SK5	口縁部	粘土紐貼り付け・繩文LR・ヨコミガキ・内部ヨコナデ・ミガキ	茶褐色	白色粒・透明粒・角閃石・赤色粒	瓶之内I式	
10	SK5	胴部	逆U字磨消繩文RL・内部ヨコナデ	茶褐色	透明粒・赤色粒・黑色粒・黄褐色粒・骨針	加曾利EⅢ式	
11	SK5	口縁部	竹管刺突2条・繩文RL	赤橙色	白色粒・透明粒・黑色粒・砂粒・骨針	瓶之内I式?	
12	SK5	橋状把手	繩文	赤橙色	白色粒・砂粒・黄褐色粒	称名寺式	
13	SK5	口縁部	繩文RL・外面ミガキ・内面ヘラナデ	茶褐色・煤付着	白色粒・透明粒・砂粒・骨針	瓶之内I式	
14	SK5	口縁部	粘土紐貼り付け・内面ヘラナデ	赤橙色	白色粒・透明粒・赤色粒・骨針	瓶之内I式	
15	SK5	口縁部	沈線・繩文・内面ヘラナデ	赤褐色	白色粒・透明粒・赤色粒・黄褐色粒・砂粒・骨針・各閃石	瓶之内I式	
16	SK5	胴部	粘土紐貼り付け・内面ヘラナデ	赤褐色	白色粒・黑色粒・砂粒	加曾利EⅢ式	
17	SK5	胴部	磨消繩文RL・内部ヨコナデ	赤褐色	白色粒・透明粒・黄褐色粒・砂粒・各閃石	称名寺式	
18	SK5	磨製石斧			長9.0cm・厚1.6~2.0cm・重2.7~4.6cm・160g	定角式	蛇紋岩
19	表土	口縁部	磨消繩文RL・内部ヨコナデ	赤橙色	白色粒・砂粒・透明粒・骨針	称名寺式	
20	表土	口縁部	眼鏡状突起貼り付け・口縁部内部ヨコナデ	赤褐色	白色粒・砂粒(角閃石)・透明粒・骨針	瓶之内I式	
21	表土	口縁部	波状口縁部突起貼り付け・内部ヨコヘラナデ	赤褐色	白色粒・砂粒・透明粒・骨針・赤色粒・黄褐色土粒	加曾利EⅣ式	
22	表土	口縁部	口脣部貼り付け・内外部ヨコナデ	赤橙色	白色粒・砂粒・透明粒・赤色粒	瓶之内I式	

3 動物遺存体

縄文時代後期の土坑2基でサンプルを採取しており、SK5の貝類について分析を行った。

(1) SK4

称名寺式期の土坑である。覆土2層・3層で土サンプルを採取したが、2層で炭化材小片数点、3層で軽石片1点を検出したのみである。

(2) SK5

堀之内1式期の土坑内に貝層を形成していた。貝層部分の全量をサンプルとして採取し、分析を行った。水洗前の体積は不明、水洗後の重量は532.5gである。

分析の結果、貝類2科3分類群の190個体を同定した（第3表）。主体となるオキアサリについて殻長の計測を行った。オキアサリが97.4%と圧倒的に多く、イボキサゴとアサリがわずかに混じる。イボキサゴは殻軸4点のみであり混獲の可能性が高い。アサリは殻長43.2mmの1点で、食用として採取された可能性があるが、ほぼオキアサリのみを採取したといえる。オキアサリの殻長の平均±標準偏差は $27.6\text{mm} \pm 4.6\text{mm}$ であった（第4表）。30mm以下の小形が主体であり、25mm未満の幼貝も多く混じるいっぽう、40mmを超える大きなものも混じっている。大きさにこだわらずに採取している。

オキアサリは、東京湾内湾奥部の菊田川・花見川・汐田川水系の縄文中期から晩期貝塚でもっとも多く利用された。サンプルはごくわずかであるが、貝散布をみても本種が圧倒的に多く、大規模な貝層は活発なオキアサリ漁によって形成されたとみられる。後期前葉の海岸線は、現世埋め立て前とほぼ変わらない位置にあったと推定されており、東側の小支谷と花見川本谷を3kmほど下って、オキアサリの採取を頻繁に行っていたのであろう。なお、貝類以外の骨や炭化種子等は検出していない。また、土坑底面付近で土サンプルを採取したが、検出されたのは炭化材のごく小片のみであった。

参考文献

- 早稲田大学考古学研究室 1961 「築地貝塚、城山・築地2貝塚（千葉市）」『印旛手賀』
穴倉昭一郎 1971 「長作築地貝塚」（手書き原稿）

第3表 貝種組成

種名	個体数	%
オキアサリ	185	97.4%
イボキサゴ	4	2.1%
アサリ	1	0.5%
合計	190	100.0%

第4表 オキアサリ殻分布

mm	個体数
-10.0	
-15.0	
-20.0	1
-25.0	34
-30.0	51
-35.0	18
-40.0	8
-45.0	3
-50.0	
平均数	112
平均	27.6
標準偏差	4.6

第3章　まとめ

今回の調査では、縄文時代中期後葉～後期前葉の遺構・遺物が検出・出土し、台地北側で確認されているような貝塚、貝層は確認されず、SK5内で検出された混貝土のみであった。

1960（昭和35）年に台地北部の貝塚で行われた調査の報告書、「早稲田大学考古学研究室報告第8冊「印旛・手賀」1961（昭和36）年発行」には、馬蹄形貝塚の東側谷に面した地点にトレンチを入れ、貝層およびその下の土層から称名寺式、堀之内式、加曾利B式の土器が出土したと記され、掲載された実測図や写真からその多くは堀之内式が占めている。

1971（昭和46）年の千葉市立高等学校社会研究クラブによる測量の際に行われた表探では、堀之内式33%、加曾利B式49%であったと報告されている。

今回の調査でも確認された土器は堀之内式が大部分ではあるが、これに加曾利EⅢ・Ⅳ式土器の破片が加わっている。

このことから、台地南部に営まれた集落の開始は中期末となり、遺跡の開始時期は一段階遡るものと考えられる。

台地上の土地使用については、先述の千葉市立高等学校社会研究クラブ測量の貝塚周辺地形図と今回の調査地との位置関係（第1図）を見ると、調査地点は南に開口する馬蹄形貝塚の南東方向に位置し、距離は南西側の貝塚の端部より約75m、開口部より約86mであった。

同測量図では貝塚開口部から南側に向かってやや高度を増していくが、図域外にあたるこの高まりの終点に今回の調査地点があり、その南側は急崖となって支谷に落ちていく。貝塚形成期の集落の範囲は貝塚の内部のみではなく貝塚の所在する台地上全体に広がっていたと考えられる。

縄文時代以降では、台地南側先端の旧妙見神社、谷を挟んだ南西の段丘上にある長嶺寺館跡など千葉氏関連の史跡があることから中世遺構が存在する可能性もあったが、今調査では確認できなかった。

周辺は宅地化が進み、当遺跡は貝塚上に盛土を施して宅地をしているとあるが、貝塚と居住域の関係など集落全体として遺跡を捉えるにはかなりの時間を要することとなる。

他の遺跡も市街化が著しく、個々の遺跡もさることながら各遺跡の間連性も機会を活用して究明されることを願いたい。

参考文献

- 浦口 宏 1961 印旛手賀 印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査 早稲田大学考古学研究室報告 第8冊 早稲田大学考古学研究室
- 後藤和民他 1974 千葉市史 第1巻 原始古代中世編 千葉市
- 武田宗久 1989 縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退（2）貝塚博物館紀要 第16号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 上守秀明 2012 歴史講座「貝塚のあるムラ・ないムラ」（公財）千葉県教育振興財团文化財センター
- 松田光太郎 高尾将矢 2018 千葉市貝塚遺跡調査 千葉市教育委員会

写 真 図 版

図版1



調査地遠景（東側台地から）北東から



調査前状況 北から



表土掘削 北から



掘削状況 北から



P1 完掘 北から



P3 完掘 北から



SK2 完掘 東から



SK4 完掘 東から

図版2



SK5 遺物出土状況 北東から



SK5 完掘 東から



北側完掘全景 南から



南側完掘全景 北から



テストピット 北から



1

SK5 出土遗物



2

SK2 出土遗物



3

SK4 出土遗物

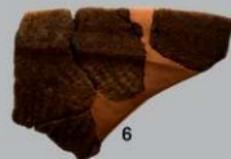


4



5

SK5 出土遗物



6

图版 4



SK5 出土遗物



遗构外出土遗物

報告書抄録

千葉市築地貝塚

— 戸建住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2021(令和3)年6月10日

編 集 株式会社 ノガミ
千葉県成田市並木町221番地

発 行 千葉市教育委員会
千葉市中央区問屋町1-35

印 刷 株式会社 ライフ
千葉県成田市東和田595